

玉川日記

初編

上

~ 13

3188

1



武振志丹之月

13
3188

昭和十年
六月二十五日

松下

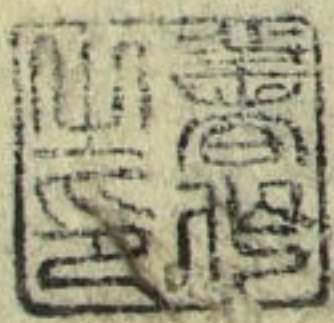
松月露譚序

聞之。兩漢之時。小說家者流。十五
家。千三百八十篇。蓋出於稗官。自
是其後。稗史之作。盛乎唐宋。甚乎
元明。至乎清。而益致其多。彼致其
多。之習。遂波及于我矣。於是乎當

今我邦稗官。前後所著。汗牛充棟。大爲昇平盛事焉。余亦倣其盛事。而輯錄此編。昉于露窪之長家乘。畢于松露寺。往牒焉。因名曰松月露談。庶幾將俾人。因因果應報之事。頓然開悟。勸其善。黜其惡耳。雖

然書不盡言。言不盡意。則若其不憚。何加之書。舖頻急發。販而先刊。前篇三卷。讀者。俟後篇發販。而洞覽一面。以備自家鑒誡。則幸甚云。爾

南仙舍拙人題



採擷野語如秋
草滋薰藉說別
見于卷外
秀軒醉題

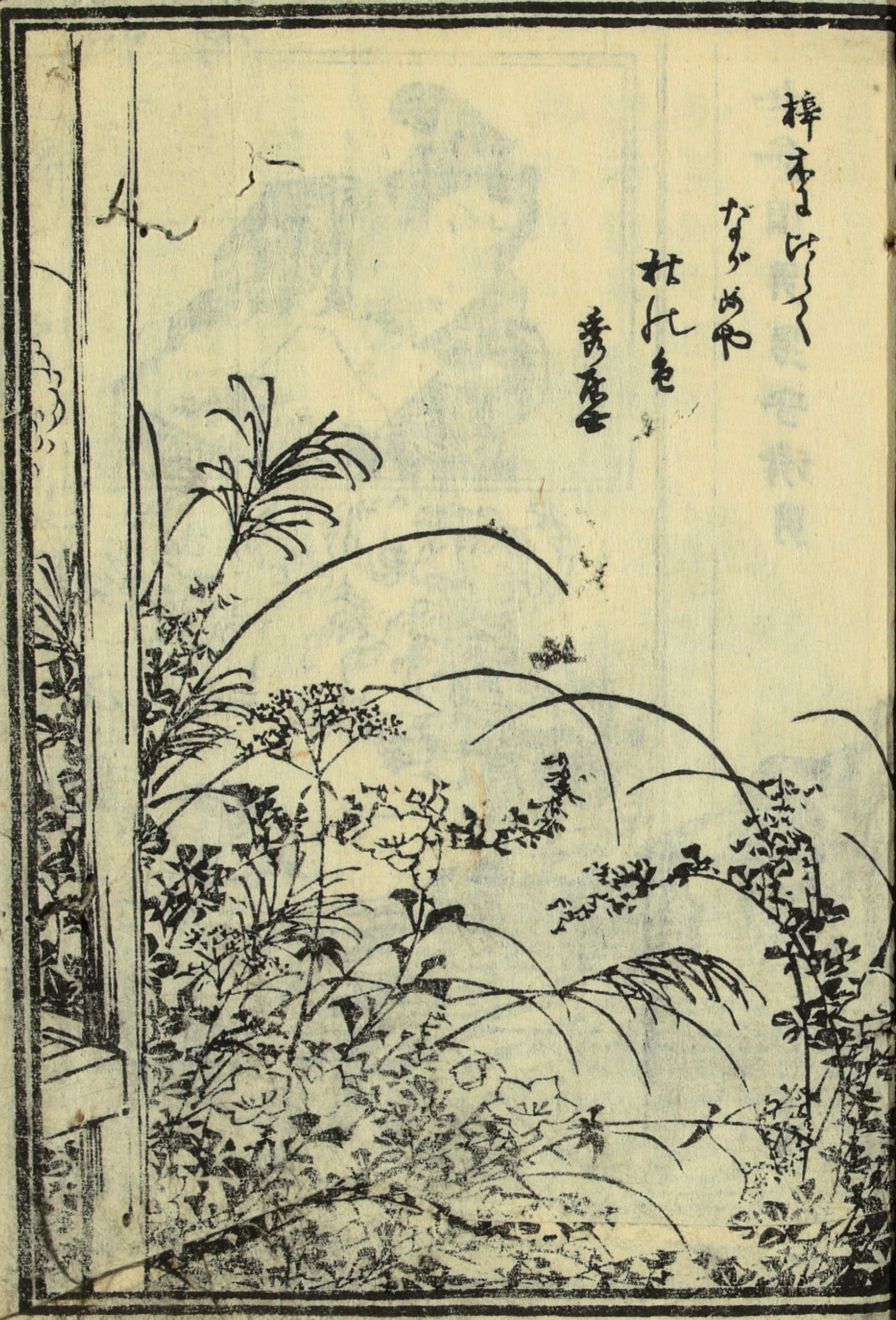


梓李以々

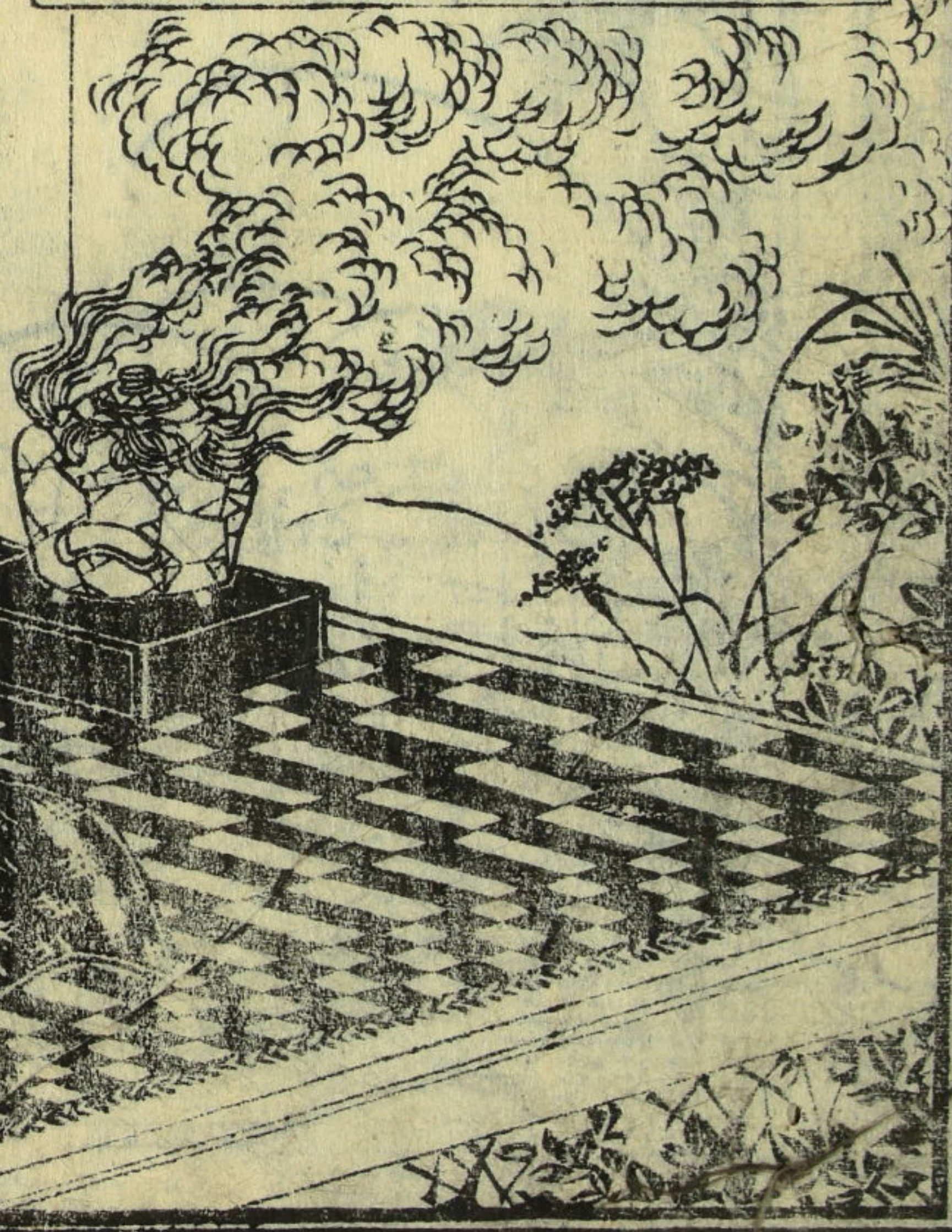
たふめり

杜比色

秀軒



女子倡男男守清男



子復生却寄情男

子豈知有味契

說得因果

冊子成

君山書



つれづれもうすつれづれも玉川の
 心遣さえ松蔭され家と消てまねが
 枝と帯れる月のえりあればまじ
 まれ事してひりしりしりしり
 かたれるをさよまじつたお
 成思ふも聲りありと志しすや

墨本堂化



松月 玉川日記卷之一

江戸 南仙笑楚満人作

笏壹回

摂津の園芦屋のさく味沼村又慶女塚といふ
 ありおぼくく云往古遠里一人の女あり其名を
 うるまひあやめ
 菟名負と慶女といふある又男二人あり俱よこれを
 慕ふ一人ハ當國の住人名を佐々多といふ一人ハ
 和泉の山の住人智勢といふ其形おろび志共い

剛果ワカのものがあつあり。是も今いまの世よに似にて、
 あつとけ。細布こまぬいやさらす垣根かきねとよみさうあつとけの
 必かならず玉川たまがわのむらうあつとけ。酒希屋さけのや杏太あんたのつとよあつとけ者ものあり。
 是こゝろらうあつとけ時ときのさつあつとけ會あひかつあつとけがあつとけあつあつとけしあつとけや
 俄あつとけに福あつとけあつあつとけらうあつとけくあつとけ。奴僕やつやくあつあつとけこあつとけかあつとけへあつとけ布あつとけと酒あつとけさあつとけつ
 て家業いへごころとせしあつとけよあつとけなあつとけづあつとけらあつとけのあつとけ間あつとけはあつとけ逆あつとけらあつとけはあつとけ並あつとけぶあつとけらあつとけす
 るあつとけ死あつとけかあつとけ限あつとけ者あつとけとあつとけらあつとけうあつとけらあつとけくあつとけ人あつとけみあつとけるあつとけ細布こまぬいのあつとけ本あつとけ意あつとけと
 めてあつとけなあつとけやあつとけしあつとけぬあつとけ妻あつとけハあつとけ先あつとけ達あつとけとあつとけくあつとけみあつとけまあつとけぐあつとけりあつとけ志あつとけとあつとけがあつとけみ

又また給たまはどとくと今いま年としと五ごのなままと逆さかへくいいとと義ぎ白はく
 るあつとけ娘むすめあり。斯かくくあつとけ杏太あんたのあつとけ齡あつとけ取あつとけはあつとけ耳あつとけたあつとけはあつとけ向あつとけと
 せあつとけしあつとけらあつとけうあつとけどあつとけしあつとけこあつとけさあつとけくあつとけよあつとけらあつとけああつとけつあつとけとあつとけけあつとけまあつとけぐあつとけ後あつとけらあつとけきあつとけ中あつとけ
 ハあつとけ謹あつとけみあつとけくあつとけああつとけつあつとけとあつとけくあつとけ原あつとけ来あつとけ殊あつとけのあつとけ外あつとけああつとけるあつとけるあつとけ好あつとけのあつとけよあつとけが
 ちあつとけらあつとけがあつとけゆあつとけゑあつとけはあつとけ獨あつとけりあつとけとあつとけ寐あつとけのあつとけ間あつとけはあつとけさあつとけみあつとけくあつとけさあつとけよあつとけ妻あつとけとあつとけわあつとけけあつとけりあつとけ
 かあつとけへあつとけたあつとけやあつとけとあつとけ思あつとけひあつとけはあつとけ里あつとけああつとけるあつとけるあつとけああつとけつあつとけ吞あつとけ百あつとけ世あつとけはあつとけはあつとけ新あつとけ作あつとけ
 とあつとけいあつとけへあつとけるあつとけ者もののあつとけ娘むすめはあつとけああつとけ系あつとけとあつとけくあつとけ今いま年とし十九じゅうきゅう才さいはあつとけちあつとけりあつとけ
 つあつとけらあつとけがあつとけ美あつとけ面あつとけがあつとけちあつとけらあつとけらあつとけらあつとけかあつとけつあつとけとあつとけはあつとけまあつとけがあつとけ杏太あんたのあつとけ



考つゝの 志願はむとけ何卒 妻はせをわく
 下をあまけまじと窮作は三の金を貸され
 せつろ夏まびしく返さざる金の方よ
 お糸と紋は得て存じと毎日日あち 信促進
 窮作も并にお金の百程のうしが妻はぐが
 も病のうへは死去るまで夏の間は歩つてさう
 負しくまの行ひさすぐは六十は逆き
 娘をつらとせんも不便は思ひさるぐよと

言ひおたけとど更な合を細つて
 何かせえく素ぐらひける頃の師走の
 世間の妻の然とくさめたとて其中は窮作が
 家ら火の消へつらか如くまぐものか入り涙の
 く服もるく志あるぐらゆる流しと飯
 孝行の娘おあぐなせんとの髪づつめたる瘦せ
 帯折ら入来る吝ちのりもあまつらふ
 意はく得らぬとて一年も更な

虫睡のそらろくくる

各々の山二の山のかきぬ

母の御入御織とききく 寝作がらちの志きみと

母の御入御織とききく 寝作がらちの志きみと

甘きトよくあぐら寝作ハんく 寝イヤとよハ且

ぬさぬよくぬさぬま〜 寝「アイヤ寝りよく

も来ませぬおちモウある年〜 日く来るハ

よあつりけ〜おのくハえと坊が明ぬぬる

私がおびトやが有難い夏ハ牛が牙一

達者ぐ目ハ目境いしらホよ草双紙でも

よめる。齒ハ大丈夫法續でも

切〜あつとがら〜とからうす。とよでハ何として

廿年也二十年ハ氣づ〜ハある牛〜と思

〜とけね〜私〜毎日足とを〜

〜ハ〜牛〜牛〜

〜ハ〜私〜

〜ハ〜私〜

〜ハ〜私〜

金を貸して呼ぶが利足はあろう。元金も今返さ
ど最早今年も大晦日又間もあつたよ。とあつた
志やる不届くや。何不氣の、私やとくそ
るげからよとよくあるとが。毎がよとよく愛後
代官もあはれもせねがうらぬ。そのさうとせね
違ふよとよくあつた入でもそのはねるぬを
難う難でもあつた入。けさのよあつた
這入とく居て月をすしやれ十日とハ生らぬを

人の命と取るよある夏好みはせねど。違ふ出
ぬと入はつたよ。仕度がつらう。そのでもせねを
うらぬ。サア子でよとよく兼ぐのうらぬの
おや。おがりの夏とあつた。アノとちの娘はお糸
とく下つたが。貸しと五あめの終文を借し
帯代とく五あめのゆめや。こゝろ六十
よ。アノ子ハまご漸く十九と北あつた。年が
ついでつた。女とく若ハあつた。

のの眉毛まゆげでも落おちして送送り物ものでも解とくかたさうしや
 今いまよそのよめは見えぬくもさくさくしや。そままも
 湯ゆかがるけさびあつ毒どく理りふとらひいたぬ私わたしも今いま随まか
 おま暮くしと居おることトやうら女おんな房ぼうと世よ緒いとと
 かかみの妾めかけとかへぬるえぞといふ者ものハ毎日まいにちある
 程ほどあまどよの身み代しろのしろらら葉はへへ物ものがいつつ貫くわんが
 長ながし又また妾めかけといふ者ものも給たま合あがあるるううは衣きぬ扱あも
 ききねねばばららぬぬ彼かれ是これととくく銭ぜにがいるるよよららく

そとぐの相あひ送送りしや。さうこの所ところの娘むすめも何なにら
 よよととささままばば。ままがが當あたりりハ給たま合あるるのの妾めかけおんおん始はじめ終しま
 ハハ送送りかか女おんな房ぼうよよもも赤あかききととままののいいののでももささらら。そそららまま
 且かつババ娘むすめ也なりハハ氏うぢののここのの興きようもも同どうよよららやや。哉いかでか子この
 世よももささらら。夏なつトトややううらら。ししややググららののとともも親おやかかひひよ
 湯ゆかかさせせるるがが當あたりりのの身み代しろのの係けいししもも私わたしももささらら
 よよもも成なりりももささららとといいふふとといいふふ信しん不ふ通つうででるるののゆゆらら
 葉はへへととささららののよよめめははささららのの親おやははああつつててら

徳のいふ言はるるのそまじく不業知るまじく是非とま
 今らつゝの隙にやがていふでも不器用なめて接
 さつゝやるがよひト。あづまきうく言ひらから。お宗
 が方とひる目ハ細くるつゝはさるまじく。う
 る死こそ可笑けと窮作ハむのうち片後りく
 思へども詮方るひまじく。窮イモウ今又たどりて
 あるこの心深切うくく娘と山野望るのよ
 まする修親の身又とてりつたるるあ

難くはごまのま子とごはるのたむのハごも親の
 僕ももろのませぬもの。つは晦日トヤまうても
 最早間もごまのませぬバ。ごまごまはまうても
 たら。早速於合のし一まうて。一変するまじく
 二及も三及も。あづのよひのし一ませうから
 どのぞままで血流るる下下とせ下とせ
 杏太のハ不真氣よ。一とまじくうのるまじく
 のは道ハ親の自由のまじく

親の爲夫のしるふハ君領域より。のハ世間
 いふらまふけいひの「さ」そまららるる。と年が遠ふ
 がどのであらうか。やしくの弟の出世するの事
 と後ふころハ親のあつはがらるの由あるや。モウ
 そふらひひで。時もま。さぬ今返さ。やま今年
 出来ぬものか。来。まらう。ま。ま。天から降
 まる。地。ら。涌。ま。ひ。と。あ。して金が出来。ふ
 び。が。ご。ざ。ら。ぬ。大。概。よ。人。と。馬。鹿。よ。老。い。ふ。よ。ふ。ど

ざる何でも。聖日。来る。ま。う。で。ま。ら。う。と。ま。ま。

不。多。く。く。あ。ら。う。と。や。の。ト。

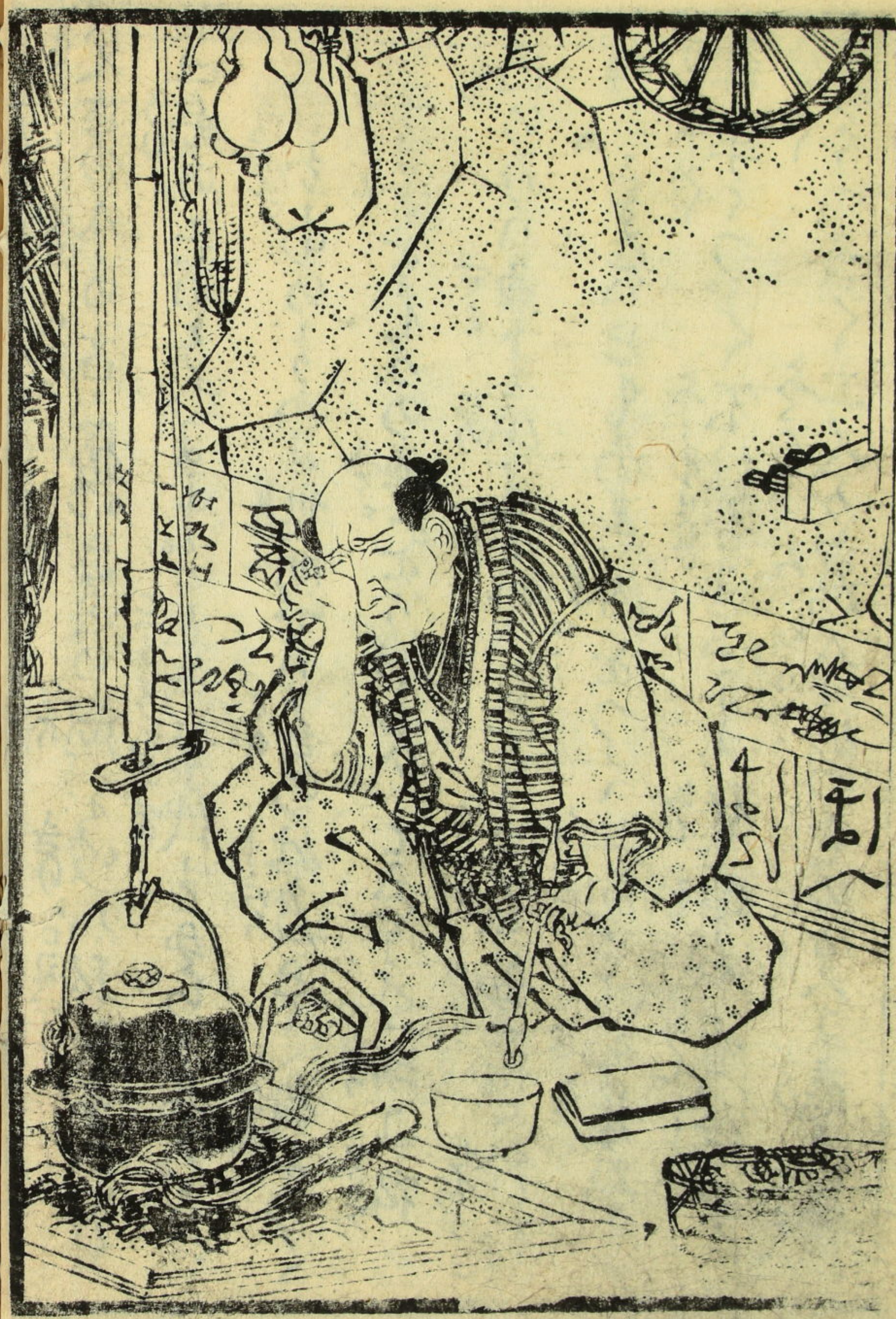
第二回

或大福長者の詞。今。さ。君。の。と。く。教。ふ。人。ハ。必
 福人。と。う。り。金。と。奴。僕。の。と。く。賤。し。む。る。人。ハ。終。り
 困窮。ま。ま。ら。ら。る。と。ま。ま。バ。後。神。論。ふ。も。相。愛。す。る
 更。兄。の。と。く。字。し。て。孔。方。と。い。ふ。と。見。へ。又。聖。の。の。し。て
 克。禮。び。足。の。ふ。して。克。走。り。と。ま。ま。と。ぬ。る。者。ハ。前。よ

有つことさうさうの者ハ後ハあると口きや女を
 よぶハ金の喜と非若者流の滑稽言うべする哉
 彼の細布屋各々衆の窮作が娘をさめとらんと
 金よせるところ無理催促日來る迄は否否の
 返るせよと詞とつがへ家路へこそハ返るは
 窮作がさうさうのむき娘のふ前回目さく萬と
 りひ志をりてつくとと我方を悔まぐらひ
 お糸ハ父が物れうちとひかると傍へより
 中

父さる今の各々後ハさるの詞をばハ私と金の
 金のそのうへよまご五兩帯代とやらよ女つ
 の言かあのよあよ世間で行まのは及とて
 の障子とたるのあまどうのこさうぐ中よ私
 肉のみらあまもけいよまよまよとて
 ろくそまらとあまはとつ、工向さへもまぬ
 理年つづく石仕合とて一が貸さや借はゆ
 ありつづく二人が命いりその喜よ喜





20
11
1

からへ勤奉公より行くまこと。け貧乏の助けを
賜ひてあらしむはからちう。驚く事うつり合ひて
こころの想の爲の事だげに。ともたふのうごかして
ぬ。吝ちのうするぬの呼へ私とやうく。あまへの
どくどくの事いんむいれいませ。今をさるる事
合ふと満ちぬと。あやうとやうく入るとやう。常
病持するあまへ。此を氣のこころひのよるの中
這入ると居て。こころうとせ。いと病ひか重なる事

親一人子一人の今の身の上。あまへよりのもの
夏があつた。こころ何とるのまじやう。吝ちの
まぬが病のよります。こころ女房又まじやう。か
前がなむの事いんむいれいませ。今をさるる事
不通ぐ事あつた。こころの檢約始末くら。とまじやう
志が性する人又まじやう。こころ夏あま。そのよる
夏あま。こころ早ま。こころ網布屋へか
くむす。こころの事いんむいれいませ。今をさるる事

枕とくとして。惣まじりて。お救起終指さす
 發切あそる。いの空偽つとまのねばる。めらら
 い動とあまするまが。解へどのよまをまのりとも。苦
 畏よりいす。であろ。早のかりくと孝むる娘の
 詞又窮作はいと。回ろく。泪ながら。窮三奉臨は
 噂くめが死時又今衆ハあましも。モウ十七。どめを克
 婿とどのと。初孫の顔が。んく志よ。この中く
 今度のいも病ふ。まび本扱の。一まひする。

どので婿とどるる。が。代ハともか。も志一の
 よろ人を婿よとどる。く。む。か。つ。ま。せ。と。一。て。の
 直るま。バ。あの子が。氣よ。ま。入。り。し。る。る。さ。つ。る。る
 人も。連流して。中りよ。のの。を。ん。く。る。ら。ば。ど。の
 よふ。又。嬉。一。う。ろ。と。を。ろ。の。と。泪。ま。か。い。し。が。の。ま
 目のさ。死へ。ち。う。つ。く。よ。ふ。か。や。り。一。の。毒。学。文。首。の。ま。は。ら。い
 噴め。ハ。ち。う。つ。く。よ。ふ。か。や。り。一。の。毒。学。文。首。の。ま。は。ら。い
 不女の子。も。や。と。く。あ。ま。る。る。身。臨。の。ん。苦。く。金。打。

のおまのよめさへ。さのよめよめ容身がよしくても
 年の為もさある物と随分ちのしつ時らあ
 やおまよとよせく女庭判今川と中らのうらよ
 女ふとけいへの一生よま一人よ外持の
 であること教へてその一人のまるまばそのこの好
 似合頃の男でも持して夫婦はあまの
 見る直つ十九や廿のそこの夫は親も年の増
 つ二年聖世が世ぐあるうへにさかむさくらの

ことさげ侍をあるもぞ否るの志まある嫁入
 ことさげ色一焼んで早めやつてとりの根を
 大のこ孝行るむらひのあつて私でさくもせく
 見る直つむむづのそこのアツ親仁の生女房よ
 るる直つと思へバ勿体なるもやが天及まるも
 國へはせぬるえこの因果るがの上りト借し油
 たらしくとみとまはまづこの雪空よいとくまも
 まるらんか系入涙を袖よかくし
 一そ何の父

さんちのいふは、おかしに素直にございふにございふの日は、何が
 各おとを渡すさえが、建者たてのいひのいひに、六十ご道のいひのい
 ひのいひを、いひにすらすらいひのいひのいひのいひのいひのいひの
ありていひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの
 日よは、そん時よアもいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの
 ろいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの
 いひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの
 中ちのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの
 ちのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの

とうとう、のちに、いひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの
 ちのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの
 解とるいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの
 まませぬあひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの
 から、いひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの
 ちのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの
 最前さいぜん、いひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの
 生なまま、いひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの

トトノ酒屋へりつゝ糸のほきうをどよ一口あ
がうと憂をあらはらしむるまじはせト。何うら何まで
ひづく孝行のいとも侍務なり 却てその日の暮をうらな
はけるあまを窮作のお糸の
のよまをうらなむその方へ送るべしとのたまひける
るまじ侍務のいさうに貸ししる金子の澄文の上よ又五あまを
じつとついでしけむかかて窮作のうけをてまてあまをいさ
はよく田柄と見せくお糸をおくべきよしつて約し喜あまの
取いそまてうらなむ四日とをてきたるが方より途の人とのうけ
窮作の娘を腹まてむらじの公地はら又お糸もうなむの
いさむるお糸が 胡坐に坐あまのいさむる ありく
公の引こむとて、網布屋かかえいのりぬ大丸妻をいさむ夫とあり人
世のましといふどもはきたるが方より金のたよりあま
あまのふもあまといふまもういさむあまをいさむらんとあまのいさ
むら

お糸のいさむるまといさむるあまのいさむる
きたるあまのいさむるいさむるのいさむる
すくことしほびぬくからん。お糸は父のあまを
て六す又近き客とあまのあまのまのまの娘あまを
おまら内外の者の機嫌どりのよく主公が氣にま
のみこも万度縁約をあらはせしうが客あまのいさむる
といはらむいさむる女をいさむるいとこのあまのまの
あまの披露としてあまのあまのあまのあまのあまの
ちがねと母とよまを奉公人あまのあまのあまのあまのあまの



23
川

子母ぬ 絨や 牡蠣の 晨まてる 時を 家 ぬれぬと 女
 伶俐して 身と 賣りの 損ふ 蟹への ぐく 窮作の 娘お
 糸いさろく かくと 死せまらぬ 女の家 法に なるる け
 よう 子母が 吝嗇する 網布屋 吝嗇の 本まらう まくく
 ろめ 終よ 本妻と ころの ぐく 忽む ぬらぬく 日迄の
 志より せり。 ころの づあ のが 法に なるる まの とき 夏うら
 けき ぐく 吝嗇の 入 愛情は ひの ちまひへ くれを せす。
 高代も 主公の ひと せら せら せら せら せら せら せら

こそといふ 者ある けき 網布屋の 家の ちまひ ぬれぬ
 糸が ぬらぬ ける 後よ 出入の 者と せら せら せら せら せら せら
 よい ころ せら せら せら せら せら せら せら せら せら せら
 さぬく ともて せら せら せら せら せら せら せら せら せら せら
 ろくの 乃 理 忽 性 昔の 身と せら せら せら せら せら せら せら せら せら せら
 こけ ころ せら せら せら せら せら せら せら せら せら せら
 網布屋よ 子母 せら せら せら せら せら せら せら せら せら せら
 つる 縁助と よぶる 高代 あり 渠へ 初め して 流とるる

あを各ちの邪見のひよも奈何る病世ふや
あひひ養ひし各ちのよが親のどくうやまひ
うく勤めしう行末の娘あきぬは妻合して
家督とつがせかやと思ひ居しうど各ちのハ
とほく集がるまあむきそのまも等保よあ
るぬままどお給ハチやけし心を知る年ら
むのうちハ深女をましく思ふのうら傍よ
折らんとみハ目と以くしと扱みけきど従
来物

堅きしきまの添助主の娘るまが夜初よ
いとすやわよりへもよらざるとけま
うらふ其強面を恨みぬ終るよりの程
お系添女が系和る男振よ心をやま
人目の関よひひとるべきまどもろく
こがしけるが内娘お結と妻合へま
よしとあましく疾妬ことかきり
あめさせん各ちのへ條お結よお結が

